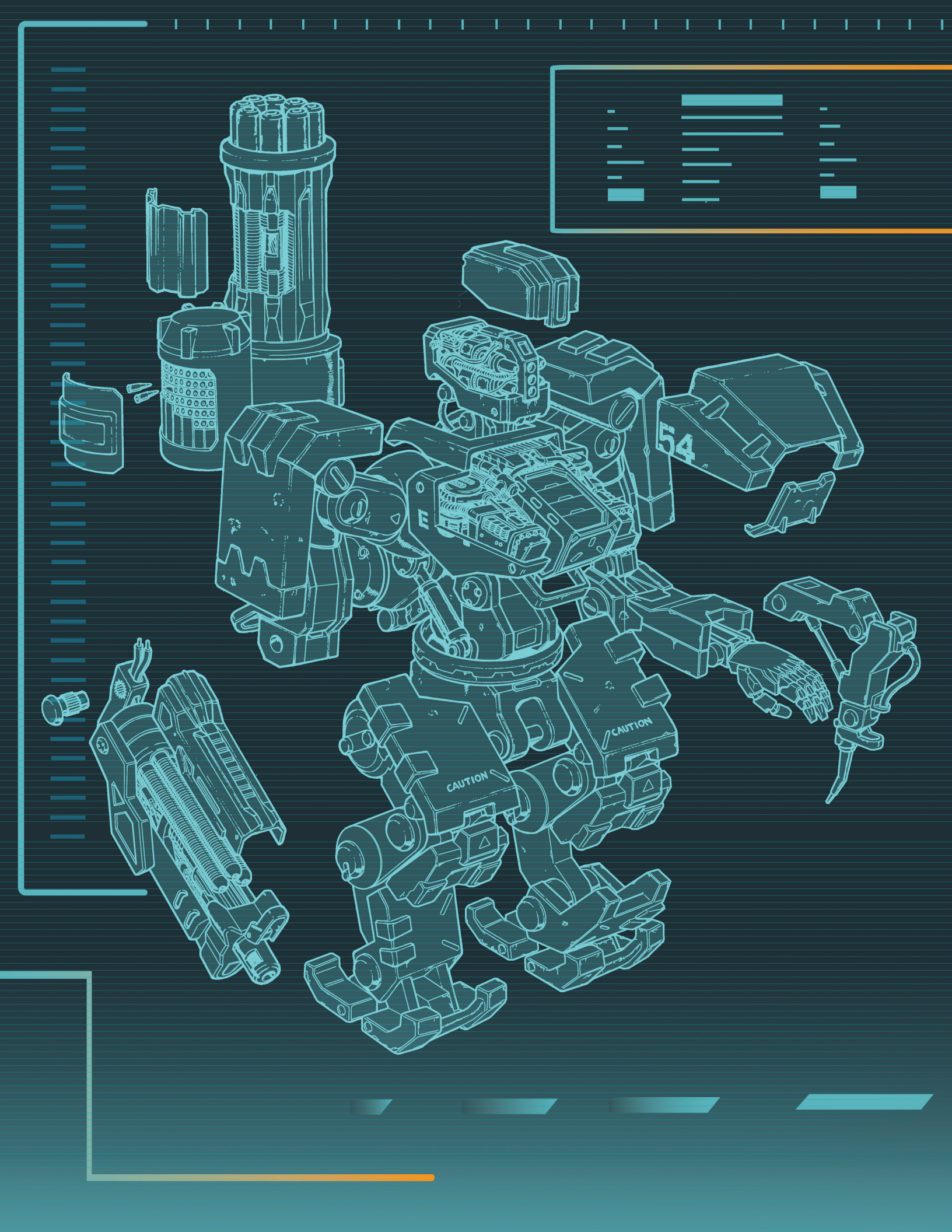
54
CAUTION
CAUTION

エントリー：9.30.1453

「袋から出してもいない豚を買うんじゃないよ」

子どもの頃、母親によく言われた言葉じゃ。いつも同じようにそこに立って、わしの実らぬ努力をほほえましくながめておった。わしが何を計画しているかも、結末も毎回お見通しじゃった。

母は、判断をあせるな、と言いたかったんじゃろう。その言葉に、わしは長いこと納得がいかんかった。

じゃがこのとおり、今は機械を自分のワークショップに招き入れとる。本来なら出会い頭に鉄クズに変えるべきヤツを。何かが引っかかったのだから仕方ない。どうしてもこの疑問を解消したいのじゃ。

この機械――クライシスで多くの命を奪ったあの怪物たちとこやつに、果たして違いはあるのか？バスティオン・ユニットが高度な知性や知識をもっていた記録などない。説明がつかんのだ。

ワークショップまでの長い道のり、悩みっぱなしじゃった。こいつの一挙手一投足を観察した。隙を見せれば攻撃してくるかもしれないと、わざと明後日の方向を向いて、CPUが油断を察知して襲ってくるように仕向けたりもした。武器を向けられれば、奴をこの疑問ごと遠慮なく葬り去れる……じゃが、思惑は外れた。

イングリッドにこれからすることを説明しながら、怒るだろうかと身構えた。しかし妻は笑った……かつて母がそうしたように。振り返ってみれば、あの目は夫の無茶を心配してたんじゃない。とことんやらないと気が済まん性分と知っておっただけじゃ。わしにとっては「計算してれば解ける謎」に過ぎんということも。

気になった式は解くしかない。どんな結果が導かれようとも。

エントリー：10.01.2218

連れ帰ったバスティオン：E54ユニットはおとなしくしちょる。わしのワークショップに興味を示している様子さえある。

調査のための一角を設け、必要になりそうな道具をそろえていたところ、いつも手元に置いているラチェット・レンチがないことに気づいた。

ガチャンという音がした。すぐさまリベット・ガンを構える。注意がそれたスキを突かれたか、と。

しかしそこにいたのは、わしのレンチを手にしたバスティオン：E54じゃった。ジェネレーターの支えを留めているボルトが緩んでいたらしく、奴は自らそのボルトを締めておったのじゃ。

レンチを受け取った後、わしは早速ユニットの外部から点検にかかった。

アイドリングが微妙にズレているらしく、時々ぎこちない動きはするとはいえ、クライシスからこれだけ経ってもその機能は健在で、驚かされるばかりじゃ。無論、これも自己修復システムのおかげかもしれん。当時、それは画期的な技術じゃった。

今となってはどうやってあんな大仕事をやりおおせたのか、自分でも不思議なくらいじゃ。完成したE54は、エンジニアリングの奇跡とされ……後に悪夢のような脅威となった。

原因はアヌビス。オムニック・クライシスを引き起こした「神格プログラム」と呼ばれる存在じゃ。このプログラムによって人類は自らの技術の頂点に牙をむかれ、絶滅寸前まで追い込まれた。

このユニットが同型機とどう違うかを解明すると心に決めておるが、奴の本質は殺人兵器であることを忘れたわけではない。決して信用しちゃならんのじゃ。

高電圧変換器のパーツを利用して、バスティオン・ユニットに組み込むためのデバイスをこしらえた。このキルスイッチは、奴がワークショップから脱走を図った場合の保険となる。妻と、家族と……ご近所のために必要なものじゃ。しょっちゅう連絡なしに顔を出すイヴァルにだって（カンベンしてくれ！）、そのくらいの気遣いはしてやらんとな。いくらあいつでも、暴走したバスティオンに大事な花壇を荒らされたり……とにかく悲惨な目にあったりしたら気の毒じゃ。

キルスイッチを組み立て終えた頃、窓の外に小鳥が止まっていることに気づいた。それ自体は珍しいことじゃない。普段は蒸気や煙がひっきりなしに吹き出すから、大抵すぐにいなくなるが。辛抱できるのはわしのような老いぼれだけじゃ。しかし、この日のお客さんとは前に会ったことがあった――森でバスティオン・ユニットを見つけた日に見かけた鳥じゃ。その時はこの機械が野鳥に対して温和に接しているのを意外に思っただけじゃった。じゃがこんなところまで機械を追って来るくらいじゃ、バスティオン：E54との間に何らかのきずながあるんじゃろう。世の中わからんもんだ。手強い数式にまたひとつ変数が増えた。問題はどんどん複雑になるが……だからこそ面白い。

：10.02.0923

今日はまず作業場にバスティオン・ユニットを移動させた。試しに口頭で命令してみたところ、反応は芳しくなかった。こいつが機械でなければ「とまどっている」と形容したかもしれん。わしが苛立ち、声を荒げるほど、状況は悪化していった。しびれを切らしたわしは奴に詰め寄り、目と目を……もとい、光学センサーと光学センサーを突き合わせてこう言ってやった。

「まったく、電源を入れながらでないと進められん調査でよかったな！叩き潰してやるところじゃ！」

頭を冷やそうと離れると、バスティオン・ユニットはゆっくりと調査スペースに自ら移動し――わしを待つかのように止まった。

さらに困惑したのが、そのままわしにシステムへのアクセスを許した上、キルスイッチを組み込ませた点じゃ。いずれも自己防衛プロトコルが反応すると思われる行為じゃったが、何も起きなかった――ユニットはただ、窓のほうを眺めていた。今日もあの鳥がやってきたのじゃ。

こいつめ、わしをからかっちょるのか？じゃが、そんなことはありえない……。

とにかく、最初に調査する箇所は武器システムに決めた。E54の機体で最も堅牢で適応力のあるシステムじゃ。こういったユニットは戦い続けてこそ価値があるという考えのもと設計され……そのせいで、クライシスの渦中はずいぶん苦しめられた。

解析してみると、メインシステムもサブシステムも問題なく機能しておることが分かった。しかしM249改良SAWをよくよく調べてみると、弾薬供給パーツにオイルの残留物がかなり付着していた。これは、ユニットの自動メンテナンスルーチンが、本来の弾薬消費スピードを大幅に上回っていることを示しておる。戦闘ユニット、それもここまで損傷も劣化もしていない機体にしては妙じゃ。

次に、ユニットに弾薬なしで発砲させる実験を行うことにした。弾薬マガジン供給パーツを無効化することに成功したおかげじゃ。とは言うものの、ユニットが起動している以上、自発的にパーツを有効化し実弾を発射する可能性もあったので、作業には細心の注意を払う必要はあったがの。

レーザー・ターゲットを使って武器システムを稼働させようとしたのじゃが……反応なし。TK-47弾道アサルトキャノンに変形するサブシステムまで起動させたが、結果は同じ。奴は発砲しなかった。

ただ、診断画面に警告がひとつ出ているのを、わしの目がとらえた。それはほんの一瞬表示され、すぐに消えた。レーダーに反応ありじゃ！

過去に遡って調べてみると、その警告は何度も発生していた――百回、千回、いや一万回以上――バスティオン・ユニットのプログラムは武器システムに、とある指令をを出していた。

「攻撃せよ！」

アヌビスと、アヌビスが掲げた「人類を絶滅させよ」という目標に従い、バスティオン・ユニットのプログラムはターゲットにできるものすべてを攻撃し、殺害せよという命令を出し続けていたのじゃ。

これこそが、わしの知っている殺人マシンらしい行動。こいつを我が家に招き入れてよいものか、悩んだ理由じゃった。本能的にキルスイッチに手を伸ばしていた。

いやしかし……殺人マシンは自らが発している殺害命令を実行に移していない。なぜじゃ？意味が分からん。わしは自分の良心に背き、キルスイッチを置いた。いっそ、押してしまったほうがよかったのかもしれんがな……。

わしの心の中で燃え続けていた疑問は、もはや大火となっていた。考える時間がもう少し必要じゃ。

エントリー：10.03.0526

純粋に理論的なものであっても、代数学では既知の知識を元に未知の答えを求めなければならん。その代わり、代数学のルールは書き換えられることがない。固定され、信頼できる、完璧なものじゃ。

つまりこういうことじゃ。とにかくこのユニットに搭載されていると分かっている機能を試し続け、残る謎を解き明かすしかない。

バスティオンには武器システム以外に、ユニットの心臓にあたる動力システム、肉体とも言える位置情報および運動システム、そしてユニットの精神である中央処理コアが搭載されておる。この問題に機械的な解法があるなら、必ず突き止めてやる！

動力システムは、E54のフレームに収まるようできるだけコンパクトで堅牢に設計されておる。バックアップ用回路も組み込まれ、ドロップシェルで展開された際に確実に動力装置が作動し、ユニットを起動させる作りじゃ。これによりユニットは着地した瞬間から最大限の火力、戦術行動、機動力を発揮できるというわけじゃ。

バスティオンを診断用スキャナーに繋いでいる時、動力炉が四つとも無傷で残っており、限度まで発電をしていることに気づいた。システムには異常がない。この動力炉はたったひとつでもわしのワークショップの十倍以上の電力をまかなえる代物じゃ。それを四つとは贅沢な！もしこいつをスクラップすることになったら、動力システムは何かに再利用させてもらおう。

奇妙なことに、わしが深く探れば探るほど、バスティオンは落ち着かない様子になった。動力システムは機体の中でも特に厳重に守るべきパーツだからかもしれん。あるいは単純に、このトールビョーンが秘密を解き明かす瞬間が近づいていると知ってそわそわしているのかもしれんな。フハッ！

とはいえ、ユニットがここまで動いたりビクついたりするのは予想外じゃった——機体全体が緊張感に満ちておる。窓の鳥でさえも、奴を落ち着かせることはできないようじゃ。機械がどんな行動をしても対応できる自信はあったが、ただでさえ複雑な作業は緊迫した空気のおかげでより難しくなった。

しばらく苦戦するうちに、声をかけることで奴が多少落ち着くことを発見した。まったくばかげた話じゃが――効果はあった。それから、わしはユニットに話しかけるようになった。周りに誰もいなくてよかったと思う――もうろくしてブリキ缶に話しかけていると思われかねん。

動力システムには、答えは隠されていなかった。わしは位置情報と運動システムの調査を始めた。バスティオンの座標と、それに基づいた作戦行動を処理し、機体を動かすためのものだ。動力システムと同様、どちらも複数のバックアップシステムが組み込まれており、展開後の生存能力を高めておる。

着地と起動シークエンスを再現する展開テストを行ったが、致命的なエラーはなかった。しかし、再現するたびにほんの短時間ではあるが不調が発生した。着地直後にシェルのハッチが開放される寸前に、必ず同じ座標がロードされる。テストしている現時点では、この現象を発生させる要因はない。何十年も前に展開された時の残響じゃろうか？

いずれにせよ、変数をいくつか解消できた。残る謎はコアCPUだけじゃ。

エントリー：10.04.2349

大問題発生じゃ！E54のコアCPU配列は、大きなチタニウム合金のカプセルで覆われている――機体で最も厳重に守られているシステムなのじゃ。通常、ユニットの電源を切ればアクセスできるものではある。しかし起動中はユニットがカプセルをロックし、CPUを破壊しうる外的要因の侵入を防いでいるのじゃ。この機能は不正を防止する安全装置となるはずじゃった。しかし今は、カプセルを開きたがらないバスティオンに対するわしの苛立ちを煽るだけじゃ！

最初は、単純にプログラムをオーバーライドしバスティオンの電源を切ろうとした。本来なら、その程度の回避策で解決できるはずのことじゃ。だがまったく効果がなかった。わしは奴をメンテナンスモードに移行させた――普通なら全身のパーツにアクセスできるようになる。これも失敗じゃった。

バスティオンを変形させ、できた隙間にバールをねじ込んでこじ開けようとまでした。こめかみの血管が切れそうになるまで全力でふんばったが、結局開きはしなかった！

これまでの考察はどこへやら。わしの頭は新しく沸き上がった疑問に支配されてしまった。

なぜこのバスティオンは従わない？何様じゃ！一体何を隠しちょる？

その時、キルスイッチが目についた。

今すぐすべてを終わらせられるではないか。ただ、やってしまえば、「ユニットの振る舞いはCPUの物理的な損傷によるもの」という証拠が後から見つかりでもしない限り、わしが求める答えは得られないじゃろう。それでも、胸がむかむかしてもう辛抱できん！赤いボタンに手を伸ばしたその時、窓に鳥が止まっているのが見えた。

鳥と――バスティオンが鳥に向ける視線。この繋がりの正体がまだ気になっていたのかもしれない。あるいは、単純にどうなるかを見たかったのかもしれない。自分でもよく分からん。

頭に血が上ったまま、わしはキルスイッチを手放し、窓を開け放した。小鳥は躊躇なく室内に飛び込んできた。本来であれば、記録に値する出来事じゃ。普段なら鳥とロボットの不思議な関係に、あっけにとられていたじゃろう。しかし、その時は怒りで我を忘れておった。

わしはリベット・ガンを手に取り、機械に歩み寄った。この頑固者の殺人マシンめ！原型も留めないスクラップにしてやる！

終わったらこいつの頭をかち割って、欲しいものを全部吸い出してやる。こいつにふさわしい結末じゃ。こいつらはみんな、そうされるべきなんじゃ！

奴はわしに背を向けておる。チャンスじゃ！わしはリベット・ガンを構え、奴を撃つ覚悟を決めた。あとはトリガーを引けば全部終わる！

その瞬間、バスティオンが振り向いた。

彼は武器を起動しなかった。防御態勢も取らなかった。彼はわしの攻撃を避けようともせず、ただ……振り向いた。

見れば、小鳥がバスティオンの首の下から突き出ているパーツに止まり、機嫌よさそうに鳴きながら彼のアゴに体をすり寄せていた。わしが固まっていると、バスティオンの胸部パネルが一枚ずつ開いていく。やがて、ピカピカのCPUカプセルが露わになった。カチリ、ウィーン。金属のケースのロックが外れて、開いた。

わしはバスティオンが厳重に守られた自身の最深部へ手を差し込む様子に、釘付けになっていた。胸の奥から出てきた彼の手には、小枝と葉っぱでできた繊細な何かが乗っている……あの小鳥の巣じゃ！

バスティオンがそれを差し出すと、小鳥は何もかもを握り潰せそうな金属の手に優しく抱かれた住処でくつろぎはじめた。

バスティオンはわしを見上げた。

彼の光学センサーがわしの顔を探っている。あぜんと立ち尽くすわしの表情を、じっくりと見ているようじゃ。わしはリベット・ガンを取り落とした。とある感情が全身を駆け巡る。それは長らく感じていなかった……恥、じゃった。

わしは理解した……このバスティオンは確かに普通ではない。そして変わるべきは彼ではなく、自分自身だということを。

エントリー：10.06.1932

ひとつの疑問に突き動かされてこの探究の旅を始めた。それは今も解き明かせそうにないが、自分なりの答えを見つけることはできた。それで十分ではないか。これは代数学で解けない難問というわけではない。信頼の問題なのじゃ。

わしはガレージのドアを降ろしながら、バスティオンと鳥が寄り添って休んでいる姿を見た。そうしていると、母に見守られているような気がした。最初からこうなることは分かっていたよと言わんばかりに、笑顔を浮かべている気がする。

もし、あの時激情に身を任せていたら、バスティオンは今頃ジャンクになっていて、世界の謎がひとつ減っていたじゃろう。じゃがそんな世界でいいのだろうか？お互いについて知るべきことが、まだ山ほど残されとるというのに。

そう考えたわしは、バスティオンの武器システムと位置情報システムをアップグレードした。その過程で、彼の中に残存していたアヌビスのプログラムを完全に除去してやることができた。この不思議で素晴らしいロボットが、今まで一体どうやってプログラムに抵抗し続けていたのかは分からない。

まだまだ疑問は尽きんが、今は戦い続けてきた新たな友が、安心して暮らせるようになったことを喜ぶとしよう。

ADAM FOSHKO 著

HANS JENSSEN、SYLVAIN DECAUX 画